

はじめに

社会科学系といっても研究者のタイプはさまざまですし、その教育がカバーする範囲もさまざまです。そこで、まず社会科学とはなにか、という問題からお話し、それに基づいて、図書館員から見たいくつかのタイプに分類し、それぞれが抱く期待と、抱える問題について触れていきたいと思います。

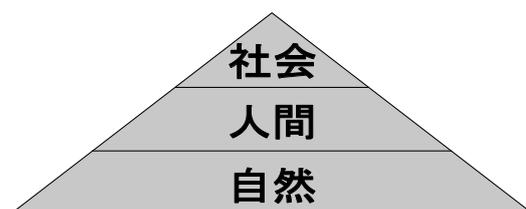
I 社会科学とはなにか

社会科学とは？

社会科学＝社会を科学する

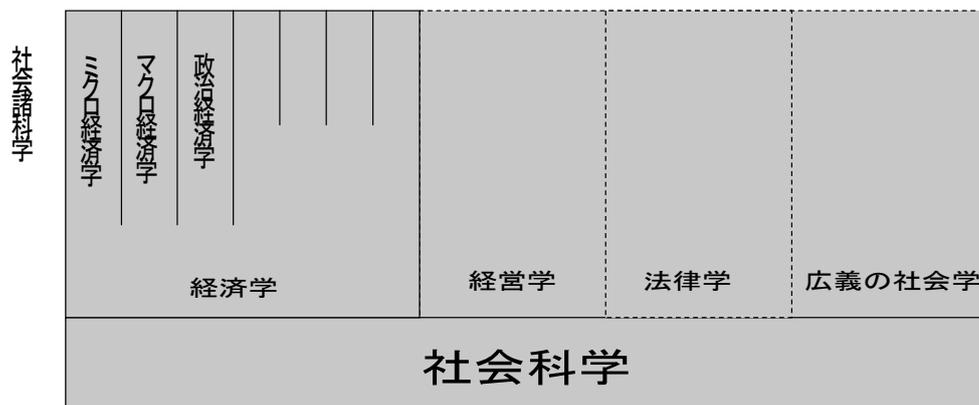
人文科学＝人間を科学する

自然科学＝自然を科学する



市民社会の活動領域

- ビジネス活動 → 経営学
- 経済活動 → 経済学
- 法にまつわる活動 → 法学
- それ以外のすべての市民的社会活動 → 広義の社会学



II 図書館員から見た社会科学者

- 本重視 vs 雑誌重視

主に本を利用するか、それとも雑誌を利用するか。

業績でも、本が重視されるか、それとも雑誌が重視されるか。

例 歴史学 vs 経済学

- 学会雑誌（国際学術雑誌） vs 大学紀要

流れは学会雑誌（国際学術雑誌）へ

例 経済学 vs 法学

- 資料（データ）志向 vs 文献志向

資料（史料）あるいはデータ（情報）を研究の中心に据えるか、それともひたすら文献を読み、考えるか

例 歴史学 vs 哲学や学説史

III 研究者に信頼される図書館

研究者から見た図書館の評価基準

- 蔵書の規模と質
- 本と雑誌の割合
- 開架と閉架
- 閲覧と貸出し
- 一般書架と特殊資料
- 中央図書館とサブジェクト・ライブラリー

IV 図書館とアーカイブ

理想的には、刊本を所蔵利用する図書館、文書類を所蔵する文書館、非図書資料を収集する博物館と、いくつかの用途別の機能分化が必要になります。しかし、それぞれを独立に持つことは非現実的な状況ですので、さしあたり図書館の中に、可能なかぎり非図書資料を収集し、整理して、利用に供するようにしたらよいと思います。

利用者である教員や研究者にとって、退職後や引退後の資料保管は難事です。あるいは、在職時であっても、利用しなくなった図書資料や非図書資料の保管と利用は、なかなか厄介な問題です。図書館がそのための手助けをできないか。それにより、個人所有であった資料を広く社会所有として公開できるようになるのではないか。一つの個人的な提案です。

V 社会科学における電子化のゆくえ

eジャーナル

近年、経済学を中心にeジャーナルの存在感は確実に高まっており、他の社会科学分野でも、便利と思う人が増えています。しかし、自然科学とはどこか決定的に違うところがあります。その違いは、eジャーナルが最新の研究文献を読むための手段とは必ずしもみなされていないという点にあるのではないのでしょうか。古い論文でもいまだによく使われる論文があり、新しい論文といっても、自然科学とは新しさのものさしが違うような気がします。

ここからは、社会科学における「新しさ」とはなにか、という興味深い問題が浮上します。

機関リポジトリ

社会科学の研究者にとって機関リポジトリのもつ意味。著書や学位論文の場合、雑誌論文の場合、とくに当該機関が発行する紀要類、あるいは、機関内で活動する研究会などの機関紙、さまざまな利点があります。著作権処理の問題が厄介です。

非図書資料のデジタル化公開

社会科学、とくにデータ重視の分野の研究者にとって、電子化の恩恵が一番感じられるのは、使いたいと思っている資料がデジタル化され、ウェブ上に公開された場合でしょう。ただ、この場合も、個人情報保護あるいは著作権処理などの問題がネックになります。

全文検索データベース

大型コレクション等の全文検索データベースの登場により、貴重資料への時空を超えたアクセスが可能となりましたが、ただしそれを賄える財力のある機関と、そうでない機関とで、図書館格差が生じます。おなじく、電子ジャーナルの利用についても、格差問題が生じます。図書館格差が拡大する最大のきっかけは近年の場合、ここにあるようです。

VI 期待するもの

今後、電子媒体が利用できれば、それで十分だ、というような社会学者が増えてくるかもしれませんが。しかし、彼らが絶対多数を占めることはおそくないと思います。社会科学の多くの分野は、相変わらず冊子体の書籍を必要とするでしょうし、ネットからは得られない知のあり方を求めるはずで、それが明確に定式化したり、言語化できたりするのは、電子化という目新しさが薄れる、数十年あるいは 100 年後のことかもしれません。それまでは、図書館を守り、育て、利用して、土俵を割らないことです。社会科学系図書館の努力目標をさしあたり三つ挙げておきます。

(1) 図書館のストックを活かす

利用率のアップ

ストックのアップ（個人蔵書の社会化）

利用してもらうための手がかりとして電子化（書誌情報あるいは資料そのもののデジタル化）

(2) 図書館の専門性を高める

研究資料の所在や探求方法などを教えてもらえるところ

(3) 開かれた図書館を心がける

広く社会に開かれた図書館、その前提として、研究者のコミュニティーに向けて開かれた図書館を心がけることが必要でしょう。そのためには、全国の図書館の連携を通じて、専門化した各館を相互に結びつける活動が必要です。図書館の国際化も電子化の技術を背景にしつつ進めていかななくてはならないと思います。